

令和7年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」 作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「まさか……、また、こんなことが起きるなんて……。」

石川県 金沢大学附属中学校 2年 杉本 賢太郎

昨年、能登地方に線状降水帯が発生したというニュースを見た時、私は言葉を失いました。令和6年1月1日に発生した能登半島地震。そのわずか9か月後、今度は豪雨が能登を襲いました。9月21日、線状降水帯が発生し、短時間に激しい雨が降り続きました。私の家に避難していた祖父は、地震の被害を受けた能登町の自宅に戻り、少しづつ復興を進めていたところでした。

ニュースで「避難勧告が発表された」と知った私は、急いで祖父の携帯に電話をかけました。コール音が鳴る間、心臓の音まで聞こえてきそうなほどドキドキしました。

「大丈夫や。今のところ家の中には水は入ってきとらん。」

祖父の声を聞いた時、思わず涙が出そうになりました。大雨の中、修理が終わっていない家や道路がまた崩れてしまわないと心配でたまりませんでした。ただただ、雨がやんでくれることを祈るしかありませんでした。

9月に仮設住宅へ入居したばかりの伯父たちも、仮設住宅に川から水が流れ込む危険があるため、祖父の家へと移動していました。伯父が送ってくれた動画には、濁った茶色の水が激しく流れ、今にも橋を越えそうな勢いで迫っていました。私はその光景に震えました。帰省の度に眺めていた穏やかな町野川の姿はどこにもありません。そこにあったのは、あらゆるものを探し流していく、恐ろしい褐色の川でした。

そして、今年の8月6日。今度は私が住む金沢に線状降水帯が発生し、朝からバケツをひっくり返したような大雨が降り続けていました。窓から外をみると、用水路から水が溢れ、次第に道路が川のようになってきていました。近くの小学校に避難所も開設され、避難勧告が出ました。私は自宅の2階へ垂直避難をしました。自宅は大きな川から距離もあり、そばに崖もないことから大雨の時には無理に避難所に移動するのではなく、垂直避難をすると事前に決めていたからです。事前に避難について決めていたため、落ち着いて雨が降りやむのを待つことができました。一方で、近隣で土砂崩れや浸水、冠水の被害が多数あったことを知り、土砂災害の危険を身近なものに感じました。

線状降水帯の発生は、予測が難しいと言われています。さらに、地震で地盤が緩んでいる場所では、少しの雨でも土砂災害が起こる危険があります。ハザードマップを見て危険な場所を知っておくことはもちろん大事ですが、それだけでは足りないと私は思います。なぜなら、自然は人間の思いどおりには動かず、日々変化しているからです。

災害は、ある日突然、私たちの生活を襲います。そしてそれは、たとえ一度経験していても、また違う形でやってくるかもしれないということを、昨年と8月の豪雨で実感しました。だからこそ、常に最新の情報を確認し、自分や家族の命を守るために準備をしておくことが必要なのです。

私は、8月の豪雨をきっかけに家族と一緒に改めて避難のシミュレーションをしました。どのタイミングでどこに避難するのか、持ち出す物は何か、学校などの外出先で避難勧告が出た場合にどうするのかなど、具体的に行動できるようにしています。町内会で行われる防災訓練にも、これからはただ参加するだけでなく、自分の身に起こるかもしれないこととして真剣に取り組むつもりです。

災害はいつ、どこで起こるか分かりません。大切なのは、「自分は大丈夫」と思い込まず、常に備えることです。大切な人の命を守るために、そして自分の命を守るために、私たちは今できることをひとつひとつ行動に移していく必要があります。これからも、能登の復興を祈りながら、自分自身も防災への意識を持ち続けたいと思います。